ヒューマンライブラリー　多様性を育む「生きている図書館」の実践

　岡　智之　東京学芸大学留学生センター教授

〇ヒューマンライブラリーとは

　ヒューマンライブラリー（「人間の図書館」、略称HL）は、最初はリビングライブラリーと呼ばれていた。文字通りには「生きている図書館」である。二０００年にデンマークのNGO(Stop the Violence)によって、北欧最大級の音楽祭であるロスキレ・フェスティバルで始まった。障害者、ホームレス、性的少数者など、社会の中で偏見や差別を経験したことがある人々が「生きている本」となり、一般「読者」と一定時間対話するというイベントである。この「図書館」は欧州評議会を巻き込みながら発展し、現在では、ヨーロッパを中心に、北米、オーストラリア、タイ、マレーシアなど九十ヵ国以上で開催されているという。

　日本では、二００八年東京大学先端科学技術研究センターの仲邑研究室が最初に開催して以来、全国各地の大学、学校、企業、市民団体に広がり、二０十七年には、HLの更なる普及と発展を目指して、日本ヒューマンライブラリー学会が発足した。

〇ヒューマンライブラリーの理念と目的

　HLは、生きている「本」と読者の対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に対して開かれた社会の実現を目指すことが基本的な理念になっている。ただ、企画のコンセプトは、主催の団体によって異なってくる。例えば、学校教育に生かす、地域住民の相互理解の促進、多様な民族の共生に役立てる、病気や障がい者、セクシュアルマイノリティなどの理解を促進するなど色々な目的で開催することが出来る。たとえば、駒澤大学の場合、第一回目は、企画理念、目的として「寛容で多様性のある社会をめざして、地域住民とマイノリティの方を結び付ける試み」とし、「あなたの心をとかす一生モノの出会いを体験しませんか？」というキャッチフレーズの元に行われた。

〇ヒューマンライブラリーの開催形態

　主催者の企画理念や目的により、HLは様々な形態で行われる。オーソドックスには、一冊の「本」に対し、「読者」が一人ずつ、一つの教室を使ってやるという明治大学のようなやり方や、公民館などを使って、大きな部屋で複数の「本」が入り、複数の「読者」と語るという駒澤大学や川口の市民団体のやり方がある。場所も、大学の大学祭でやったり、図書館やお寺などでやる場合もある。首都圏が多いが、旭川や長崎、新潟など地方でやられているHLもある。

〇東京学芸大学での初めての実践

　二〇一六年一二月、東京学芸大学で初めてのヒューマンライブラリーを行った。駒澤大学や明治大学など多くの大学では、ゼミ単位で ヒューマンライブラリーを行っているが、筆者の場合、留学生センター所属で、学部のゼミは担当しておらず、大学院のゼミも専門は言語学で直接このようなイベントを担うようなゼミではない。ゼミの学生の場合は、ある程度強制力を持ってイベントを担わせることが可能であるが、大学でゼミ単位で行えない場合は、どのようにヒューマンライブラリーを作っていったらいいだろうか。

　私の場合は、留学生センターで日本語教育と共に、留学生の日本語支援や、日本人学生との交流活動のコーディネーターをしている関係で、学内の学生支援部署ともつながりを持っていた。それでまず、学芸カフェテリア（キャリア支援を主に行う部署）や男女共同参画支援室、障がい学生支援室などの教職員に提案し、実行委員会を立ち上げることになった。八月の過程で、企画書を作成し、教員養成系大学で行う意義として、「未来の子どもに伝えたいこと」というテーマで行うこととした。また、本のカテゴリーとして、在日外国人、障がい者、セクシュアルマイノリティなどのマイノリティだけではなく、学生のキャリア支援にも役立つように、ユニークなキャリアを持った方というカテゴリーを入れ、計十二冊の本を集めることができた。

　学芸大学の場合、教育実習のために秋学期の開講が十月中旬になり、学生への呼びかけも十月中旬になってしまったが、スタッフ募集説明会には、学生支援部署の呼びかけもあり、多くの学生が集まってくれ、そのうち、三名の学生がスタッフになってくれた。また、私の持つ「多文化共修科目」という留学生と日本人学生との共修科目でも、ヒューマンライブラリーを課外活動の一環として呼びかけ、三名がスタッフとして参加してくれた。司書として、クルド人難民の協会に行ったり、外国につながる子供の支援団体に見学しに行ったり、発達障がいの方の講演の司会をしてもらったりした。また、宣伝においては、美術専攻の学生が、素晴らしいデザインのチラシ、ポスターを作ってくれ、大学内外に広く呼びかけることができた。小金井市教育委員会と社会福祉協議会にも後援を受け、学内の教職員組合や生活協同組合にも協賛団体として協賛金をいただいた。学内の先生方からも寄付金をいただき、なんとか資金面はやりくりして、当日にこぎつけた。

　当日は、「本」「スタッフ」「読者」合わせて、五十名ほどのこじんまりだが、濃密な対話の時間になった。第一回目のHLで多くの人が感じたことは、「本」の方々を〇〇障がい者やLGBTといったカテゴリーとしてではなく、ひとりの人間として理解が出来たということであろう。これが講演や書き物などでは味わえないHLの醍醐味であろう。

●第一回ヒューマンライブラリー　「本」のタイトル

・イスラム教のルールと必要となる設備（ムスリム留学生）

・クルド人問題と在日クルド人難民（在日クルド人）

・居場所を探して～外国につながる子どもたちとの六年間（外国人支援NPO）

・性と生　～「ありのまま」を考えよう～（ゲイ）

・「自分らしく」を探して（レズビアン）

・男でも女でもある境界線で谷間な生き様（性分化疾患）

・「ＡっＤeも、Ｈoんの少し、Ｄeきたかも。」（ADHD）

・発達障害当事者と「違い」について考えよう！（発達障がい）

・挫折を挫折と感じない海外好きな私（留学支援団体）

・ナナメの関係によるキャリア学習支援（学習支援NPO）

・「ああ～」「わかりません」「治りません」（膠原病）

〇　第二回ヒューマンライブラリーの内容

　二〇一七年度は、春学期の段階から、ヒューマンライブラリー説明会を行い、六月に三冊の「本」を招いた「ヒューマンライブラリー体験会」をおこなった。また、五月の国際交流合宿では、合宿参加者の異文化体験や人生の体験を語る会として「ヒューマンライブラリー」を開催した。この過程で、一年生を始め、HLを全く知らなかった学生たちが興味を持って早㏍なし、自らに担う過程が始まった。二〇一七年十二月におこなわれた第二回東京学芸大学ヒューマンライブラリーでは、「私の個性が「本」になる」をテーマに、十三冊の「本」を招き、八十名の参加で盛況に行われた。その醍醐味は、実際参加してみなければわからないが、以下、「本」のタイトル、「読者」の感想、「本」の感想、スタッフの感想を掲載するので、ヒューマンライブラリーの意義についてその一端を知っていただきたい。

* 第二回ヒューマンライブラリー　「本」のタイトル

・日本で暮らす難民の声（クルド人難民）

・在日ムスリムとの交流により、偏見のない見方をつくろう（ムスリム留学生）

・無音の世界で生きる人　言葉と生活（聴覚障がい、手話）

・障害か性格か―私の選択（双極性障害、ADHD）

・障碍から「障生（しょうせい）」へ（全盲の元高校教員）

・男でも女でもない性別「Xジェンダー」

・ゲイ夫夫（ふうふ）として暮らしていくこと

・未来の子供達のために（性同一性障害）

・性と生「学校と性」について考えてみよう！（ゲイ）

・三鷹の小さな日本語教室に集まって（日本語教室と外国人支援）

・新米先生のドタバタ療育日記（教育支援者）

・こどもを支える地域の力、こどもがつくる地域の輪（子ども食堂）

・福島におけるナナメの関係によるキャリア学習支援（高校生のキャリア学習支援者）

* 「読者」の感想（アンケートより）

・　障害/マイノリティに対する捉え方が様々であることを学んだ。

* 本には、様々な種類があること。そしてそれらはすべて大切なこと。
* 直接話せるのは興味深い
* 性について話が聞きたくて参加しました。性についていろいろ抱えているその本人の方たちからお話を聞けて、実際何を思いどのように生活してるのかが聞けてよかったです。
* 当事者の方の話を聞いたので、個人レベルの日々を知ることができ、より自分の日々に近く感じました。
* 「本」の方が生き生きと、笑顔で自分のことをお話されたことが印象的だった。
* 初めてヒューマンライブラリーに参加させていただいて、きっと「本」の方は、かたい話ばかりなさるだろうなと身構えていましたが、簡単に身の上話など話してくださり、気楽に聞くことができました。
* 聴覚障害の方々の目線について
* LGBTが身近な単語になった。
* イスラームに対する印象が変わりました。
* あまりなかったですが、「人」として、目の前の人の経験として聞くことで知っていることの肌体験というか質感は変わったと思います。
* 全く初めての内容で、ぼんやりとした認識しかしていませんでしたが、人として接していけば「何の問題もない」のかなと思いました。
* 以前、茨城で通っていた日本語教室に来ていた外国人の方は大人しく自分で問題を抱えてしまう人が多かったが、必ずしもそうではないんだなと思った。

●「本」の方の感想

* 読者の方々の生の声を聞くことが出来、話をすることが出来て良かったです。自身の視野も広がりました。
* Face to face communication makes more interesting, and lively. Like exchanging ideas. We get a lot of opinions from the guest.
* 質問がいっぱい出て、とても良かったです。運営する方の心配りが有難かったです。対話することで、「本」である私たちも世界が広がりました。
* 興味を持って聞きに来てくれる人もいたので、やった意味はあったと感じました。
* とてもおもしろかった。次回があるなら、事前交流会とか講演したい。充実の経験になった。休憩1回は少ないと始まる前に思ったけど、終わってみると休憩いらないくらいに楽しめた。
* 本として話す中で、さまざまな方の意見・考えをきくことができ、とても良い経験となりました。また話しながら、自分自身の活動や思いをふりかえることができました。
* 気軽にこのテーマを話して、理解していただけたことが最も大事なことだと思います。
* 以前と同様、自分とも向き合える、皆様の意見もたくさん聞ける、有意義な時間でした。
* 前半に、積極的なご質問があると、対話が盛んになり、ダイアログに弾みができて、うれしい。読者の皆さんには、これだけは聞きたいという質問を遠慮なさらず、投げかけていただきたい。
* ２回目の参加でしたが、緊張しました。同じセクシュアリティの方がいたので、話が似通ったらどうしようかと思いましたが、異なる話が出来て良かったです。学芸大という特性から教員志望あるいは教育関係の仕事につかれている方と対話でき、自分にとっても刺激的でした。今回は３０分で任意のクールで話せたので、他の方のお話を聴くことができ良かったです。読者としても魅力的なHLでした。ありがとうございました。
* 自分自身の話をするということを通して、自分自身の棚卸しができる良い機会でした。
* スタッフの感想

今回、私自身初めてのヒューマン・ライブラリーに、スタッフとして参加させていただきました。学部生の頃から、自分にはない経験や背景を持つ人との対話が好きだったということもあり、関心を持っていた企画でした。そして、実際に参加してみると、想像していた以上に多くの学びを得ることが出来ました。最初に、岡先生や本の方々はじめ、今回のヒューマン・ライブラリーに関わり、素晴らしい時間を作ってくださったすべての方に感謝申し上げます。

ヒューマン・ライブラリーの魅力の一つとして、普段なかなか接することのない方々と、とても近い距離間で話をすることが出来る、ということがあります。そうした状況の中で、私は、意志を持った人の強さ、想いを語る当事者の方の言葉の重みといったものを強く感じました。自らの置かれた立場から、それぞれがどう生きるか、また社会に対してどういう思いを持っているのかということに関して、心を揺さぶられるような内容のお話を聞くことが出来ました。

また、少人数で対話をすることで、「外国人」や「障害者」といったフィルターを取り払って、その人自身の生き方や考え方を聞くことが出来るのも、ヒューマン・ライブラリーの大きな意義であると考えています。実際に読者として本の方と話をしていると、マイノリティとされる人のお話を聞いているのではなく、同じ一人の人間として、その人個人と話しているという印象を強く持ちました。本の方の「物語」の中には、紙の本で読むのとは違う、メディアで伝えられるのとも違う語りも多々あり、人とじかに向き合うことの大切さを、改めて感じる機会となりました。自分が知りたい情報にすぐ手の届く時代ではありますが、だからこそ、こうした時間を、これからも大切にしたいと考えています。

〇　ヒューマンライブラリー今後の展望

　第三回のヒューマンライブラリーは、2018年12月16日（日）、本との出会いで、世界が開かれるというコンセプトのもと、「本（ヒト）と出会う、世界と出会う」のテーマで開催された。生きた「本」14冊を迎え、計43名の参加者で、小規模ながら濃密な時間を持つことができた。例年のように、在日外国人、セクシュアルマイノリティ、障害者、教育支援者などの方々のお話を少人数で聞くことを通して、マイノリティへの理解と多様性を尊重する社会への形成へと何かしら役立つことができたのではないかと考える。2018年は、日本ヒューマンライブラリー学会も2年目を迎え、研修会や研究大会などを行い、全国で、ヒューマンライブラリーを開催する気運が高揚した。

　2019年は、日本ヒューマンライブラリー学会主催で8月3日（土）「初めてのヒューマンライブラリーーヒューマンライブラリーの開催の仕方と留意点」と題して、研修会（筑波大学文京キャンパス）が開かれる。また、10月20日（日）に、東京学芸大学で、第3回日本ヒューマンライブラリー学会研究大会が開かれる。第四回東京学芸大学ヒューマンライブラリーは、2019年12月初旬を予定している。ヒューマンライブラリーに興味を持たれ、参加してみたい、あるいは、自分でも開催してみたいという方は、是非お近くのヒューマンライブラリーや研修会、学会へ参加を歓迎いたします。詳しくは、学会ホームページに各種情報が掲載されていますので、参照をお願いいたします。

日本ヒューマンライブラリー学会ホームページ

<http://www.humanlibrary.jp/>

参考文献

駒澤大学社会学科坪井ゼミ編著『ココロのバリアを溶かす―ヒューマンライブラリー事始め』人間の科学社、二０一二

坪井健・横田雅弘・工藤和宏編著『ヒューマンライブラリー―多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』明石書店、二〇一八

岡　智之「大学における多文化共生に向けた実践活動報告―国際交流活動、多文化共修科目、ヒューマンライブラリーを中心に」李修京編著『多文化共生社会に生きる―グローバル時代の多様性・人権・教育―』明石書店、二〇一九

執筆者プロフィール：

岡　智之。大阪市出身。大阪外国語大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了。博士（言語文化学）。専門は言語学。都内日本語学校、韓国で大学の日本語講師を経て、現職。留学生に対する日本語教育を始め、日本人学生と留学生との交流活動コーディネーション、多文化共修科目、大学院での日本語教師養成などの業務を行っている。日本ヒューマンライブラリー学会理事。

写真

・対話の様子　　　　　　　　　　　　　全体交流会の様子

